

# 為家と「反御子左派」再考

——歌合の判詞から——

吉 田 伶 世

はじめに

藤原俊成（御子左家）と藤原清輔（六条家）の没後、歌壇の中心は俊成の息子である定家や孫の為家へと引き継がれ、御子左家が一大勢力として君臨していた。ところが、定家没後の寛元四年（一二四八）、定家門弟だった葉室光俊と藤原知家らは御子左家歌壇に反旗を翻し、いわゆる「反御子左派」として活動を始める。葉室光俊（一二〇三～一二七六）は、定家門弟時代、為家と親しくしていた。<sup>1)</sup> また藤原知家（一一八二～一二五八）も、六条家の出身であるが、定家門弟となった後、為家と親しくしていた。<sup>2)</sup>

二人が御子左家を離反するに至った具体的な経緯は明らかでないが、安井久善氏は、「根底に歌風・歌論上の意見の相違があったことは疑いない」とし、知家に関して以下のように述べている。<sup>3)</sup>

為家は父定家の訓に忠実な保守的歌風であったので、それに対する反撥を中心に、知家の六条藤家全盛を懐古する感情、光俊の新奇な着想を主とする革新的歌風とようやく芽生えてきた歌道への自信などが結合して反御子左の旗幟を鮮明にさせた。

また井上宗雄氏は、「恐らく二人とも為家に依る御子左家の歌壇

独占制覇を快く思わなかったに違いない」<sup>4)</sup>く、「御子左家の歌風に対する不満がその基調」となっていたとしている。

以上から、御子左家と反御子左派が対立するに至った一因に、互いの歌風の違いがあったものと思われる。しかし三者の和歌を比較すると、従来の「御子左家（為家）対「反御子左派（光俊・知家）」という対立構造に、必ずしもあてはまらない部分が見受けられる。確かに、「御子左家」に対抗する勢力として「反御子左派」歌人達が台頭してきたのだろう。だが彼らは決して一枚岩だったわけではなく、それぞれが立場を異にしていたと思われる。

本論は、為家・光俊・知家がそれぞれ判者を務めた歌合の判詞から、各人の和歌に対する考え方や歌論についての分析を行うことで各々の歌論の違いについて明らかにし、光俊・知家が為家と袂を分かった一因と、従来の研究で「反御子左派」と称される光俊・知家両者の和歌観の違いを明らかにするものである。そして、いまだ直接の原因が不明とされている御子左家と「反御子左派」の対立についても考察してみたい。

なおテキストは、『新編国歌大観』<sup>5)</sup>を使用し、適宜私に傍線・波線を附した。『万葉集』の訓は『新編国歌大観』の西本願寺本の訓

に依った。

# 一 『河合社歌合』における為家の判詞

『河合社歌合』は、寛元元(一二四二)年十一月十七日に賀茂河合社で行われた歌合で、定家没後、為家が御子左家の歌壇の中心人物として初めて判詞をつけたものである。「当歌合は、新撰和歌六帖とともに、為家・真観・蓮性がともに参加した最後の私的な催し」とあることから、為家と光俊・知家が袂を分かち直前の歌合と考えられる。

以下に為家の歌論的特徴的な箇所を掲出する。十八番は、為家が「めづらし」き表現を評価した判詞である。

千鳥

十八番 左 弁

河風に千鳥鳴くなりうば玉のよるの氷の上やかなしき

右勝 行家

興つ風あら磯波のいやましに立つことやすきさよ千鳥かな

よるの水のうへやとさされたるぞ、いかがと見え侍る、たつことやすき、つねのことも、あら磯なみ千とりにてはめづらしく聞え侍れば、河風よりはおきつ風つよくや侍るべき

左歌は「河風に千鳥が鳴いている。夜の氷の上は(冷たいので)悲しいのだろうか」という歌意である。判詞では「よるの水のうへや」という表現について批判している。

「千鳥」は、「思ひかねいもがりゆけば冬の夜の河風さむみちどりなくなり」(『拾遺集』 冬 二二四 題しらず 紀貫之)とあるよ

うに、「河」と一緒に詠まれることが多い。「水」と一緒に詠まれる歌も「千鳥なく河かぜさむみ月さえて氷は秋のものにぞ有りける」(『撰歌合』 四十六番 河月似氷 左 釈阿)のように、数は多くないものの用例が見られる。しかし、「千鳥が夜の氷の上で鳴く」という表現を用いた歌があまり存在せず、「よるの水の上や」と表現するだけでは上の句と関連が薄いことを難ずるか」と解釈されている。詠者の意図としては、千鳥が「鳴く」に「泣く」を掛けて、そこから「かなし」という表現を持ち出したのだろう。だが、千鳥が鳴(泣)いているのは、氷の上が冷たいからという表現では、千鳥が鳴く様子をうまく詠み下せていない印象を与え、一首の中で、「よるの水の上や」という表現は、やや浮いてしまっている。その点を為家は難じたと思われる。

一方右歌は、「沖を吹く風で荒磯の波が一層荒く波立つところで飛び立つことがたやすい小夜千鳥であるよ」という歌意である。判詞では、「たつことやすき」と、「あら磯なみ」・「千どり」という組み合わせが目新しいことを指摘する。「たつことやすき」という表現自体はよく詠まれる。一方、「たつことやすき」と「あら磯なみ」・「千どり」の組み合わせで詠まれた例は少ないものの「いはこゆるあら磯なみにたつ千どり心ならでやうらづたふらん」(『千載集』 冬 四二六 (千鳥をよめる) 道因法師)という歌が『千載集』に見られる。つまり右歌は、勅撰集に取られた歌の表現を踏襲していると言える。だが、踏襲するといっても、ただ伝統を踏まえただけの平凡な調子に終始せず、新しい表現で詠んだ点が、「めづらし」つまり「新鮮である」と評価されたのである。従来、為家は「保守的態度」(9)と言われるが、新しい表現についてもきちんと評価している

と言える。

続いて、為家の万葉歌への姿勢が窺える判詞である。

不遇恋

廿四番 左 為教

逢ふことはかただの沖にこぐ船の見るめもしらで世を渡るかな

右かち 左京大夫

我が恋はなだかの浦のなびきもの心はよれど逢ふよしもなし

左は、かただのおきにこぐ船の見るめもしらぬといへるこ

とば、めづらしからず待るにや、右は、名高のうらのなび

き藻心はよれどと待る、やさしく待ればかちとすべし

左歌には、二句目「かただの沖」という歌枕に、「逢瀬が」難し、

四句目「見るめ」に海藻の「海松芽」と男女の逢瀬を表す「見る目」

という、二つの掛詞が用いられている。しかしいずれもよく詠まれ

る表現であるため、目新しくないと非難されている。

一方右歌は、二句目「なだかの浦」という歌枕に、「噂が世に知

られる意の「名高し」を掛け<sup>11)</sup>ている。また、『万葉集』の「むら

さきの なたかのうらの なびきもの ころろはいもに よりにし

ものを」(『万葉集』寄物陳思 二七八〇)という歌が本歌になっ

ている。本歌では、恋の想いを藻に託して詠むが、右歌ではさらに

「(恋の噂が世間に知られているので、藻がなびき寄るように心をあ

なたに寄せも)あなたに逢う方法がない」つまり、恋の想いが遂げ

られないという趣向に詠み替えている。万葉表現を引く、伝統的な

表現を踏まえて詠んでいる点が優美であると評価されたのである。

左右の歌どちらにも歌枕が詠まれているが、左歌は「めづらしから」

ぬ表現を詠むだけであるのに対し、右歌は『万葉集』を典拠として

詠んでいる。陳腐な表現摂取に止まった左歌よりも、きちんと典拠  
を持った右歌を評価したのである。為家は、右歌が本歌取りを用い  
た歌であることはおろか、本歌となった歌やその出典が万葉歌であ  
ることについては何も言及していない。しかしながら「三代集を絶  
対規範<sup>12)</sup>」としていた為家が、ここでは『万葉集』を踏まえた歌を評  
価している。

為家は本歌取りを用いた歌について、本歌の存在は示唆しても、  
とくに言及することはない。それだけでなく、本歌の出典すら明示  
していない。また、「めづらし」つまり、表現の新鮮さに注目して  
いることや、『万葉集』に典拠を持つ表現に対し、「やさし」とよい  
評価を付けていることが分かる。ここから、従来言われてきた「保  
守的」、または「三代集を絶対規範」といった姿勢に止まっていな  
いと言える。

## 二 『歌合文永二年七月』における光俊の判詞

『歌合文永二年七月』は、文永二(一二六五)年七月に催された  
歌合で、続古今集成立を前に活発化した後嵯峨院歌壇の一つの催し  
とされる。公の歌合ではなく、作者は院の近臣が多くを占める私的  
な歌合であった。<sup>13)</sup>

まず、光俊が本歌取りをした歌の内容について指摘した判詞につ  
いて検討したい。

山花

一番 左勝 御製

うゑし時まちどほなりし山桜花さきそめて春もへにけり

右 通成卿

春たつといぶきの山のしら雲のかかるこずゑは花ぞ咲くらん

左歌ありし菊よりもさくらにうつろひて、うゑし時もはるをへにけるすがた、優艶にこそ見え給ふれ、右の歌は立春の朝などに雲をみて花ぞさくらむとおもひ侍らん事はあまりとや侍るべからん、

春たつとききつるからに春日山きえあへぬ雪の花と見ゆらん、と申す歌にゆづりて作者の存知もや侍らん、いかさまにも左歌は、詞備六義、興入万歌、尤可為勝之由定申之

左歌は、『古今集』の「うゑし時花まちどほにありしきくうつろふ秋にあはむとや見し」(『古今集』 秋 寛平御時きさいの宮の歌合のうた 大江千里 二七一)を本歌として詠まれた歌である。本歌三句目の「ありし菊」が、左歌三句目で「山桜」と置き換えられていることを、「ありし菊よりもさくらにうつろひて」と説明している。また本歌では、花開くのを待ち望んで植えた菊が、見ごろを過ぎて枯れてゆく様子を詠むのに対し、左歌では、咲くのが待ち遠しかった山桜がやっと咲き始めた様子を詠む。本歌の、これから冬へと季節が移り替わろうとする寂しい秋の情景を、左歌では次第に盛りになってゆく春の情景に詠み替えている。この点を光俊は「優艶」と評価している。それだけでなく、歌の表現が六義つまり、和歌における六種の表現形式を完備しており、興にあふれているとまで褒め称えている。歌合では、一番目の左歌は必ず勝という規則があるが、この高評価も、左歌の作者が御製であったことが由来しているだろう。

一方で、右歌も本歌取りをしているにも関わらず、非難されている。本歌は『後撰集』の「春立つとききつるからにかすが山消えあ

へぬ雪の花とみゆらむ」(『後撰集』 春 はる立つ日よめる 凡河内躬恒 二二)という歌で、詞書に「はる立つ日よめる」とあることから、立春の歌として詠まれたものである。ここから本歌は、立春の日に春日山に消えずに残っている雪を花に見立てて詠んだと言える。右歌も、一句目で「春たつと」と用い、立春を表している。立春になって伊吹山を見ると白雲がかかっている。その梢には花が咲いているのだらう、と、伊吹山にかかる白雲を満開の桜に見立てて詠んでいる。確かに、雲や雪を花に見立てて詠む先例は数多く存在する。<sup>14)</sup>しかし、立春とは暦の上のことであり、春になったとはいえず、実際はまだ雪が残る時期である。そのような寒々しさの残る立春の日に、雲を満開の桜に見立てて詠むのはやや無理があるということを非難したと思われる。

ここから光俊は、たとえきちんと本歌取りの規則に従っていたとしても、歌の内容に整合性が取れなければ評価をしないことが分かる。番えられた左歌が後嵯峨院御製だったため、右歌を負としなくてはならなかったという事情を差し引いたとしても、やや理屈が先行していることは否めない。

続いて、光俊の万葉歌に対する姿勢についての判詞である。

忍久恋

廿七番 左 資平卿

年をへてすきの入江にすみなるあぢきなきまで猶忍ぶかな

右勝 具氏朝臣

あぢきなく思ひにまけぬとしをへていつまで忍ぶ涙なるらむ

左歌、弘長元年百首入道相国、風あらきすさの入江に浪こえてあぢきなきまでぬるる袖かな、句のおき所是にたがは

ずや侍らん、この本歌は万葉にあり、あぢのすむすさの入江と申す歌にや侍らん、さてあぢきなきとはうへて侍るにこそ、右歌下句優にきこえ侍れば、尤可為勝

左歌は『弘長百首』四四三の西園寺実氏詠「風あらきすさの入江の波こえてあぢきなきまでぬるる袖かな」を本歌としているが、二句目「すさの入江の」と、四句目「あぢきなきまで」の句の位置が本歌と変わらない点が非難されている。さらに光俊はこの実氏詠の本歌「あぢのすむすさのいりえのありそまつわをまつこらはただひとりのみ」(『万葉集』寄物陳思 二七五)にまで言及をしている。本歌の「あぢ(味臈)のすむ」を『弘長百首』では「あぢきなき」と読み替え「あぢきなく(味臈来鳴く\泣く)」の掛詞とし、「泣く」の縁語で「ぬるる袖かな」とつなげている。

一方右歌は、上句で恋心を忍んで過ごしてきた長さを詠むことで、下句「いつまで忍ぶ涙」の表現をより響かせている。また『古今集』の「わびはつる時さへ物の悲しきはいづこをしのお涙なるらむ」(『古今集』恋 題しらず よみ人しらず 八一三)という歌と、下句がよく似ている。本歌取りはしていないが、勅撰集入集歌と似た表現であることから、優美な印象を与えると評価された結果、勝となったと考えられる。

光俊は、本歌取りを用いた歌に対して、本歌となった歌を挙げるだけでなく、その出典と作者まで記載していることが分かる。さらに勝敗には直接関係のない、本歌が本歌取りをした歌の一部と、その出典を記載し解説を加えている。ここから光俊の場合、判詞は単に勝敗をつけるだけに止まっていなかったことが分かる。

光俊の判詞の特徴としては、本歌取りを用いた歌について、本歌

の存在を指摘し、その出典も明示していることがまず挙げられる。その際、本歌取りの規則に違反している歌はもちろんだが、きちんと規則に則っていても、歌の内容に整合性が取れないものには難色を示している。また、勝敗の判定とは直接関係のない、本歌の基となった歌(本歌が本歌取りをした歌)とその出典にまで言及し、本歌取りの経緯について解説を加えている。さらに本歌取りの規則を犯しているものは、たとえ出典が『万葉集』によったものでも負の判定を付けている。

万葉を尊重していたとされる光俊であるが、ここから無批判な万葉至上主義者ではないことが窺える。

### 三 『春日若宮社歌合』における知家の判詞

『春日若宮社歌合』は、寛元四(一二四八)年十二月に春日若宮社奉納のために催された歌合である。出詠歌人は光俊・知家を中心とするいわゆる反御子左派歌人たちと藤原信実らで、この歌合を「反御子左派」の活動の旗上げとする見方がほぼ定着している。

次に挙げたのは、知家が本歌取りの歌について指摘した判詞である。

#### 恋

十六番 左勝 従三位藤原顕氏

逢ふと見るその面影もいたづらにさめてはかなきうたたねの夢

右 左近衛権少将藤原忠兼

須磨の海士のしほたれ衣きもせぬに人をうらみの波ぞかけける  
右歌、授<sup>マ</sup>本の歌に、露<sup>ツ</sup>わけむきもせぬにといふ歌に相似て侍るうへに、禪定殿下の建保の御百首の御詠に、須磨のあ

まのしほ焼衣おのれのみなれてもかかる袖の波かな、心詞  
かはらずや侍らん、左は、又めづらしからねど、又さした  
る難には見及び侍らず、可勝か

右歌は「須磨の海士のような濡れた衣を着ているわけでもないのに、あの人を恨んで流した涙で袖が濡れている」という歌意だが、「心詞」つまり「歌の内容と句の並びなどの表現」が本歌の趣向と全く変わらない点が非難されている。

まず酷似が指摘された歌は「なつくさの つゆわけころも きも  
せぬに わがころもでの ひるときもなき」（『万葉集』 夏相聞  
寄露 一九九四）という『万葉集』の歌で、「夏草に降りた露を  
かき分けた衣を着ているわけでもないのに、涙によって袖の乾くと  
きはなし」という歌意である。右歌は本歌の二句目「つゆわけころ  
も」と三句目「きもせぬに」を取り、さらに「つゆわけころも」を、  
「しほたれ衣」に詠み替えてはいるが、どちらも「涙で濡れた袖が  
乾くひまがない」という趣向が酷似している。

次に指摘された歌は、九条道家が「建保の御百首」つまり建保三  
年内大臣家百首で詠んだとされる「すまのあまのしほやき衣おのれ  
のみなれてもかかる袖の浪かな」（『続千載集』 恋 家に百首歌よ  
み侍りける時、恋を 光明峰寺入道前撰政左大臣 一三八二）とい  
う歌で、須磨の海士が塩を焼くときの着衣になぞらえ、なれ親しん  
でいても涙に袖が濡れてしまうと詠む。「すまのあまの」以外、少  
しずつ表現を替えているが、本歌と同じ二句目に「しほたれ衣」を  
置き、下句の「波がかかる」「涙で袖が濡れる」という表現の趣向  
がやはり酷似している。本歌から歌の内容や詞といった表現を多分  
に摂取することはタブーであるため、知家は批判したのである。

一方左歌である。「面影」や「うたたねの夢」といった表現は、  
古今集時代からよく詠まれるものであるため、新鮮味がないと指摘  
される。<sup>16</sup>だが、右歌のような欠点も特に見られないため勝とされた。  
両首ともあまり高い評価はされていない。だが目新しさはなくとも  
欠点のない左歌のほうがよいと判断したのでろう。

この判詞で知家は、本歌取りを用いた歌に対し、その本歌と出典  
を明記していることが分かる。とくに、「心詞かはらず」として指  
摘された歌二首は、歌を挙げるだけでなくその出典も記載しており、  
この点は光俊と共通していると言えよう。

続いて、知家の万葉歌に対する考え方の一端がうかがわれる判詞  
である。

#### 雪

十一番 左持 散位藤原重氏

おのづからとはれましかばいかがせんつもりてふかき庭のしら  
雪

右 兵部権少輔菅原在氏

あま小舟はつ瀬のかたを見わたせばひ原やいづく山のしら雪

左歌、つもりてふかき庭の白雪、よろしくきこえ待るに、  
右の、海士小舟はつせも、万葉の古風すてがたく侍れば、  
しひて勝負を申すに及ばず

左歌は和泉式部の「まつ人のいまもきたらばいかがせんふままく  
をしき庭の白雪」（『和泉式部統集』 庭雪 五六六）という歌を本  
歌としている。本歌では、訪れを待っている相手に来て欲しいけれ  
ど、それによって美しい庭の白雪が踏まれてしまうのも惜しいと詠  
んでいるのに対し、左歌は、万が一来訪者があつたら、庭には白雪

が深く積もってしまっているので立ち寄れないのではないかと庭に積もる雪の趣向を替えて詠んでいる。本歌取りの規則をきちんと踏まえて詠んでいる点が「よろしく聞え侍る」と評価されたのである。

一方右歌は、「あまをぶね はつせのやまに ふるゆきの けながくこひし きみがおとぞする」(『万葉集』 冬相聞 右柿本朝臣人麿之歌集出 二三四七)という歌を参考にしたと思われる。「あまをぶね」「はつせ」「ひはら」「ゆき」といった言葉を取捨するだけで、本歌取りには至っていないと思われるが、万葉歌を踏まえて詠んでいる点が「万葉の古風すてがたく」つまり「このまま負にするのは捨てがたい」と評価されたのである。

左歌は和泉式部の歌を本歌取りしているが、右の万葉の伝統的な表現を踏まえた歌もなおざりにはできないとして、持の判定を付けたと思われる。ここから知家の『万葉集』を重視する姿勢が窺える。

知家の判詞では、本歌取りを用いた歌に対して、本歌の存在を指摘し、歌の一部または一首すべてを記載し、出典を明示している。それだけでなく、本歌の内容や表現、句の位置、歌の詞を取捨しすぎているものには負にしていることから、本歌取りの規則に則って判定していると言えよう。

また、万葉表現を踏まえた歌に対して評価していることから、万葉古風への傾倒があったことが窺える。それは知家が『万葉集』を家学としていた六条家の出身であることが関係しているよう。岩崎禮太郎氏は、「(光俊と共に御子左家に反旗を翻した頃から)万葉集を尊重する父祖の家学に目ざめ」たと述べている。ここから、当歌合判詞においても「万葉的な表現」に意識が働いていたと言えよう。

## おわりに

各歌合判詞における為家・知家・光俊の特徴についての考察を試みた。為家は、本歌取りをした歌に対して、本歌の存在は示唆しても、具体的に本歌を提示したり典拠を挙げたりはしていない。一方光俊と知家は、本歌取りをした歌について、本歌やその出典を明示するという点で共通していた。出典を記すことで、勝敗の根拠が明確になり、判定に説得力が生まれる。それだけでなく、客観的にかつ公平な判定であるという裏付けにもなるだろう。

この本歌の扱い方という点において、従来指摘されてきた通り、為家と「反御子左派」歌人たちの間に隔たりがあることが見られる。また、本歌取りの規則に従った判詞をつけたり、歌の内容に実景との整合性を求めたりといったように、客観的かつ論理的に判をつける光俊・知家と、勝敗の根拠が曖昧で、ともすると主観的な判詞だと取られかねない為家とでは、判定をめぐる不満や誤解が生じる可能性は十分考えられ、これが少なくとも御子左家と「反御子左派」の対立の一因になったのではないかと思われる。

しかし、光俊と知家との間にも違いが見られた。光俊は、本歌がきちんと踏まえられていても、歌の内容に整合性が取れない場合は負にしている。ましてや本歌取りの規則をきちんと踏まえられていなければ、たとえ出典に万葉表現が踏まえられていたとしても負の判定を付けている。ここから光俊はより理屈的な判をつけていたと言える。一方知家は、本歌取りが正しく用いられている歌は評価している。また、判定を付ける際、六条藤家の歌学の意識から、万葉表現を踏まえた歌を評価していた。本歌取りを用いた歌に対し、そ

の内容にまで踏み込むか否かといった点で、光俊と知家の間に差が見られた。それだけでなく、光俊はたとえ万葉表現の見える歌であつても必ずしも勝敗に反映させていないのに対し、知家は万葉を重視するような判詞をつけていた。従来「万葉重視」と言われてきた「反御子左派」であるが、実際は『万葉集』または「万葉表現」に対して、若干の温度差があつたと思われる。確かに、両者とも勝敗の根拠を明確にするなど、客観的かつ論理的に判詞をつけるという点では共通しているが、本歌取りの歌に対し内容に踏み込むかといった点や、「万葉表現」をどこまで判詞に反映するかといった点で、両者の立場や、和歌の考え方に差異が認められた。

さらに為家に関して言えば、歌表現の「めづらし」さを評価している点も注目し得る。従来「保守的」と言われる為家だが、目新しい表現に対して必ずしも否定的だつたわけではないと考えられる。また、『万葉集』を典拠とした歌も評価していることから、従来の「三代集重視かつ万葉に否定的な御子左家」対「万葉重視の「反御子左派」という単なる二項対立の構図に当てはまらないことも指摘できる。

為家と「反御子左派（光俊・知家）」との間には、確かに勝敗の根拠を明示し判詞に客観性や公平性を持たせるか否かという点で隔たりが存在する。そしてその隔たりが、後に光俊と知家が御子左家歌壇を離反する一因となつた可能性は十分考えられるだろう。一方で、「反御子左派（光俊・知家）」内部でも、和歌表現の考え方に對して差異が見られた。このことから、光俊・知家は「反御子左派」としてともに活動しながらも、両者は立場を異にしていたことが認められるのではないだろうか。

# 注

- (1) 『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー 二〇一四年十二月）、安井久善「藤原光俊の研究」（笠間書院 一九七三年）、安井久善「為家と光俊」（『国文学 解釈と教材の研究』12（10）一九六七年八月）参照
- (2) 『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー 二〇一四年十二月）、岩崎禮太郎「知家の歌における古典摂取の様相と変遷―諸歌人との対比において―」（『日本文学研究』22 一九八六年十一月一日）参照
- (3) 安井久善「為家と光俊」（『国文学 解釈と教材の研究』12（10）一九六七年八月）
- (4) 井上宗雄「真観をめぐって―鎌倉期歌壇の側面―」（『和歌文学研究』4 一九五七年八月）
- (5) 『新編国歌大観』（古典ライブラリー <http://kksystems.sakuracnp.kotenlibary/>）『日本国語大辞典オンライン版』（『日国オンライン』ネットアドバンス（二〇〇七年））
- (6) 『新編国歌大観』「河合社歌合寛元元年十一月解題」より抜粋
- (7) 新井早紀ほか「寛元元年『河合社歌合』試注」（『尾道大学日本文学論叢』（別冊）二〇一〇年十二月三十一日）より引用
- (8) 「たつことやすき」は「立ち去る」・「断つ（布など）」・「立つ（波）」などと掛けられよく詠まれる。例としては「けふのみと春をおもはぬ時だにも立つことやすき花のかげかは」（『古今集』春 一三四 亭子院の歌合のはるのはてのうた 凡河内躬恒）等がある。
- (9) 二岩崎氏、(3)安井氏、(4)井上氏らによって、為家の歌風は「保守的」であると指摘されている。
- (10) 「かただ」が詠まれた例として「なみかくる君にあふみのかただぶねしげきあしまを行くかたぞなき」（『五百番歌合』恋 千百九十六番 右 家長 二三九一）などがある。また、「みるめ」が詠まれた例には



「みるめかるあまとはなしに君こふるわが衣手のかわく時なき」(『拾遺集』恋題しらず よみ人しらず 六六七) などがある。

(11) (7)に同じ。

(12) (2)に同じ。

(13) 『新編国歌大観』「歌合文永二年七月解題」、井上宗雄「歌壇・文永二年」(『鎌倉時代歌人伝の研究』風間書房 一九九七年三月)に収録 参照。

(14) 雲や雪を花に見立てて詠む先例としては「春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすぞなく」(『古今集』春 雪の木にふりかかれるをよめる 素性法師 六) などがある。

(15) 福田秀一「鎌倉中期歌壇史における反御子左派の活動と業績(上)」(『国語と国文学』41 一九六四年八月参照)。

(16) 「面影」や「うたたねの夢」といった表現を詠んだ例は、「思ひつつぬればや人の見えつらむ夢としりせばさめざらましを」(『古今集』恋題しらず 小野小町 五五二)、「うたたねに恋しきひとを見てしより夢てふ物は憑みそめてき」(『古今集』恋題しらず 小野小町 五五三)、「ゆめにだにつれなき人のおもかけをたのみもはてじこころぐだくに」(『忠岑集』五三) など多く見られる。

(17) その他に参考にした歌として「みまろつく(なる) みわやまみればこもりくのはつせのひはら おもほゆるかも」(『万葉集』雑 右三首柿本朝臣人麿之歌集出 一〇九五) がある。

(18) (2)岩崎氏稿参照。

## 受贈雑誌(五)

湘南文学

東海大学日本文学会

昭和女子大学大学院日本文学紀要

昭和女子大学

叙説

奈良女子大学国語国文学会

人文

鹿児島県立短期大学

人文学報

都立大学人文学部国文学研究室

成蹊国文

成蹊大学文学部日本文学科研究室

成城国文学

成城国文学会

成城国文学論集

成城大学大学院文学研究科

全国文学館協議会紀要

全国文学館協議会

清泉女子大学大学院人文学研究論集

清泉女子大学大学院

専修国文

専修大学日本語日本文学文化学会

高岡市万葉歴史館紀要

高岡市万葉歴史館

高岡市万葉歴史館叢書

高岡市万葉歴史館

玉藻

フェリス学院大学文学会

近松研究所紀要

園田学園女子大学近松研究所

中央大学国文

中央大学国文学会

帝京日本文化論集

帝京大学国語国文学会